

福岡大学医学部同窓会

同窓会会報

第14号

第12回 福岡大学医学部同窓会総会ご案内 卒業教育（公開講座）ご案内

と き 平成5年7月10日（土）
 ところ 福岡国際ホール（西日本新聞会館16階）
 ＊詳細は2ページ（表紙裏面）をご覧ください



ドミトリーちゃんの森

（関連記事が13ページに掲載されています）

福岡大学医学部同窓会第12回総会 並びに卒後教育（公開講座）ご案内

下記の通り福岡大学医学部同窓会第12回総会並びに卒後教育（公開講座）のご案内を申し上げます。多数の方のご出席をお待ちしています。

記

- 日時 平成5年7月10日（土）
- ◆卒後教育（公開講座） 入場無料 16時30分
 - ・エイズとの正しい付き合い方
講師 宮本 康嗣先生（福大薬理学助手・6回生）
 - ・高齢者の膝痛の治療
講師 緒方 公介先生（福大整形外科学教授）
 - ◆同窓会総会（正会員のみ） 18時00分
引き続き
木村恒二郎先生（5回生）教授就任（島根医大法医学）記念講演
 - ◆懇親パーティ 19時00分
会費 正会員、特別会員 5千円
準会員（学生） 1千円
 - ◆学年会 別紙の通り 20時30分頃
- 場所 福岡市天神1丁目4-1
福岡国際ホール（西日本新聞会館16階） TEL 092-712-8855
- 出欠通知 同封の葉書により6月18日までをお願いします。
準会員（学生）の方は返信葉書をクラス世話人にお渡し下さい。

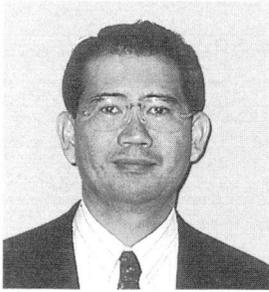
平成5年5月15日

会長 高木 忠 博（1回生）

幹事 春野 政 虎（13回生）

目 次

第12回総会並びに卒後教育（公開講座）ご案内	2
会長挨拶（高木）	3
同窓会理事会活動報告（重田）	3
新任教授挨拶（岡崎教授、広木教授）	6
退任教授挨拶（犬塚教授）	8
医学部教授第1号誕生（木村恒二郎先生）	10
露西亞人未熟児顛末記（蜂谷）	13
教室紹介（整形外科学、産科婦人科学）	14
キャンパス便り（12回医学祭）	16
計報（幾野俊英先生）	17
教育職員人事、会議報告	18
過誤訂正（92年版名簿、13号会報）	19
編集後記	20



ご挨拶

会長 高木 忠博 (1回生)

新期同窓会が動き始めて約7カ月がすぎました。まだまだ十分な活動が出来ず反省ばかりの活動状況ですが、真剣に取り組んで行きたいと思えます。同窓会には種々な目的、問題とが複雑に絡まって存在します。例えば一つの問題が出て来たと仮定します。その問題を考える時、一個人としての意見、医局員としての意見、同窓生としての意見、その他色々な立場での意見、夫々は極端に言えば全部違うと思えますが、こんな時我々が選択すべき基準は、やはり同窓生として、同窓会としての立場での選択が大切ではないかと考えますが、皆さんのご意見はいかがでしょうか？ ドシドシ意見を出して貰いたいと思えます。そしてその意見を受ける窓口としての役割を各理事に、セクション別にお願ひしましたので、一応の組織作りは出来たと思えますので多数の意見を述べに来てください。又、毎月第4週の金曜日には定期理事会をしています。同窓会活動に関心のある人は是非遠慮無く来てください。諸手を上げて待っています。



同窓会理事会活動報告

副会長 重田 正義 (2回生)

昨年7月、高木同窓会長の下に新理事会がスタートして、8カ月が過ぎ去ろうとしております。

開かれた、アクティブな同窓会をめざそうという高木会長の方針の下に、理事会でもさまざまな討論が行われてまいりました。

この8カ月の理事会議事録を振り返りながら、現在までの同窓会理事会の活動について御報告致したいと思えます。

さて皆さんは、同窓会活動とはどのようなものとお考えでしょうか。

新理事会では、まず、もう一度原点に帰って同窓会活動というものを考え、我々なりに、活動目標(目的)をかかげてみたいと考えました。

そして、以下の様な目標をかかげてみました。

1. 今後の福岡大学医学部同窓会活動について

- 1) 同窓会は福岡大学医学部同窓生と福大医学部の発展に寄与するものである。
- 2) 活動目標(目的)は
 - ①母校発展の為に助言、援助のできる同窓会をめざす(学内)。
 - ②医師会あるいは地域における同窓生のまとまりをめざす(学外)。
- 3) 第一歩として、
 - ①同窓会理事相互の結束並びに目的意識の統一。
 - ②支部活動組織化。

目的が決まれば、次は組織体制作り、そして実行です。

まず理事会の組織を、同窓会内のいろいろな問題に対応出来る様に、機能的なものに変更し

てみました。

以下の様な、理事会の役割分担（担当理事制と委員会制）であります。

学内、学外とも、さまざまな問題が生じ、いろいろと同窓会に対する、期待、激励、意見、批判を戴く今日の状況ではあります。

我々新理事会も、発足してまだ8カ月、やっと動き出せる体制作りが出来つつあると、御理

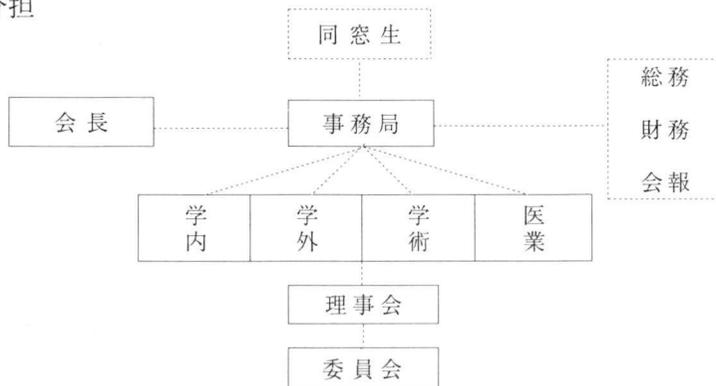
解戴きたいと思います。

すでにさる2月、各医局代表の同窓生有志と学内担当理事の間で、学内問題委員会（仮称）が開催され、活発な話し合いが行われております。

今後、各分野でも委員会が行なわれる予定であります。

2. 理事の役割分担の変更と理事構成について

1) 役割分担



分 担	業 務 の 内 容	担 当 * : ヘッド
学 内	大学内の諸問題の情報収集とその対応 医局に関する諸問題の情報収集とその対応、及び医局間の意見交換 学生からの意見収集と学生問題に対する対応 学生に対する啓蒙活動と援助	二見喜太郎 * 穴井 堅能 大慈弥裕之 東原 秀行 城戸 和明 廣橋 紀正
学 外	支部の育成、援助並びに支部の意見収集 支部長会に関する事項 学術活動並びに同窓会の運営に関し、他学及び他学同窓会との連絡並びに情報収集	重田 正義 * 柴田 陽三 井上 隆則
学 術	卒後教育並びに公開講座の立案及び実施 同窓生の学術研究業績の収集と評価、及びその顕彰	穴井 堅能 * 二見喜太郎 小金丸史隆 東原 秀行 重田 正義
医 業	同窓生の医業活動の実態把握と問題点の集約 同窓生相互の意見、情報交換の場の提供と医業活動の援助	
事 務 局	総括事項 総会、評議員会、理事会の準備、運営、議事録の作成 会則及び諸規則に関する事項 役員に関する事項 名簿の発行 他の担当に属しない事項	大慈弥裕之 * 馬渡 秀仁 松前 知治 春野 政虎

事務局 〔小金丸〕	財務	予算、決算 会費に関する事項 金銭の出納並びに会計 税務に関する事項 営利事業に関する事項 その他財務管理全般に関する事項	小金丸史隆* 柴田陽三
	広報	会報の発行に関する事項 広報活動に関する事項	田中伸之介* 平田雅昭 伊東博巳-評

福大医学部も創立20周年をむかえ、卒業生も、学内学外の医療の第一線で苦闘しております。今我々に必要なものは、福大卒業生としての自覚、自信、誇りではないでしょうか。

このような状況の中で、同窓会の果たす役割はますます重要なものになっていくのではないかと考えます。

理事会は今後も皆様のご意見、ご批判を頂きながら、母校と同窓生の発展に、本当に役立つ同窓会をめざして頑張りたいと考えております。皆様の御協力を切にお願い致します。

以上、拙筆ですが、同窓会理事会活動報告とさせていただきます。

同窓会設立10周年記念寄付金集計

同窓会設立10周年の記念事業の資金として、皆様に寄付をお願いいたしました所、下記の表のように多額のご協力を戴く事が出来ました。紙上をお借りして厚く御礼申し上げます。

回	人数	金額(円)	回	人数	金額(円)	回	人数	金額(円)
1	33	830,000	6	20	390,000	11	16	160,000
2	27	650,000	7	14	280,000	12	8	80,000
3	15	300,000	8	18	230,000	13	6	80,000
4	31	650,000	9	21	250,000	14	4	40,000
5	21	410,000	10	12	130,000	15	0	0
合計			246人			4,480,000円		

92年版同窓会員名簿任意代金納入状況

92年版同窓会員名簿任意代金をお払い込み戴きまして有り難うございました。平成4年度末現在の納入状況は下記の通りです。

回	人数	金額	回	人数	金額	回	人数	金額
1	26	76,440	6	28	82,320	11	24	70,560
2	18	52,920	7	20	58,800	12	15	44,100
3	21	61,740	8	33	97,020	13	18	52,920
4	43	126,420	9	25	73,500	14	5	14,700
5	19	55,860	10	16	47,040	15	4	11,760
合計			315人			926,100円		

新任のごあいさつ



岡崎 正敏教授の略歴

- 昭和43年 3月 久留米大学医学部卒業
 ♪ 43年 4月 九州大学医学部附属病院研修医 (第1外科)
 ♪ 46年 4月 佐世保共済病院外科勤務
 ♪ 48年 4月 国立がんセンター病院放射線診断部勤務
 ♪ 50年 1月 川崎市がん検診センター勤務
 ♪ 53年 4月 国立がんセンター病院放射線診断部勤務
 ♪ 56年 8月 福岡大学病院助手 (放射線科)
 平成 4年10月 ♪ 医学部教授 (放射線医学)

『一患者・一カルテの恩恵』

放射線医学 教授 岡崎 正敏

この度、福岡大学医学部放射線医学教室の教授に就任させていただき、皆様に深く感謝しています。私が教授になれましたのは、偏に皆様、特に本学卒業生の強力な御支援の賜物であったことは誰もが認めるところです。この恩恵に報いるべく頑張る所存ですのでよろしくお願い致します。

私のこれまでの生き方、物の考え方等について“一患者・一カルテの恩恵”を題材として述べます。

先日、東京の国立がんセンター開設30周年記念パーティーに出席し、久しぶりに懐かしい方々と再会しました(著者は1973年から8年間在籍)。

その席で初代運営部長から大変興味深いお話をうかがいました。久留勝初代院長は開設にあたり、1患者・1カルテシステムを強硬に主張され、周囲の反対を押し切ってこのシステムを導入されたそうです。同システムはがんセンターの研究・診療・教育をささえ、集学的治療の根源をなすものであり、久留先生の炯眼には感服しているとお話でした。私自身、所属、年齢や地位と関係なしに、自由で活発な討論が何故がんセンターだけ(?)は可能なのか不思議でならない部分がありましたが、このお話を聞いて合点がいきました。

私の人生も幸か不幸か、同システムの恩恵(?)に預かり大きく変わったのです、元々外科医で

あった私が、がんセンター放射線診断部で乳房X線診断に取り組み始めたのは18年前です。

Eganの本に微細石灰化像で発見され触知不能乳癌等の記載があり“早くこんな小さな癌を見つきたいものだ”と思っていました。その矢先に5mm範囲の集簇した微細石灰化像症例に遭遇しました。“腫瘍や硬結は触知できないが、外国の成書に記載されている微小乳癌の代表的な所見に非常に類似している”旨レポートしました。さらに、これらの病変の一連の検査法の実際までも紹介しましたが、実績のない悲しさ(がんセンターに行って10カ月目)、私のレポートは無視され、患者さんは放置されていました。半年後、患者さんは別の訴えで、呼吸器外来の鈴木明先生(後、札幌医大内科教授:胸部X線読影の第一人者、著者らはメイさんと呼称)を受診しました。そこで、カルテに貼られていた私の書いたレポートが明さんの目に止まることとなりました。メイさんから“こんなレポートを君が書いているんだがどうなっているんだ”と質問されました。説明したらメイさんはすぐ前回診療した外科医(現在、某医科大学外科教授)のところに行き、“若い人が一生懸命やっているのにそれを無視して良いのか”という苦言を呈し、biopsyの運びとなりました。本症例が私にとって触知不能微小乳癌の第1号でした。このようなhotな関係が存在する国立がんセン

ターの魅力にとりつかれ、私は外科医をあきらめ放射線科医になりました。

同センターは、“カンファランスセンター”という別名があるくらい、毎日臓器別のカンファランスがあり、内科、外科、放射線科等という壁がまったくないところです。年齢や地位と関係なく、連日ケンカのような討論(bloody discussion)が繰り返されています。また、結果よりもそれに至るまでの思考課程が最も重要視されるカンファランスです。カンファランスのおかげで、放射線診断部の仲間のみならず、肝外科の長谷川先生、幕内先生、病理の先生方等の多数の友達ができ、今も一緒に仕事をさせてもらっており、私の一大財産となっています。その後、八尾教授のお誘いで8年間の東京生活とおさらばし、消化器病センターができるはずであった福岡大学病院へ赴任しました。福岡大学での最初の頃は患者さんも少なく“私は何をしに福岡へ帰って来たのか”と嘆くことも多かったようです。しかし1年も経つと次第に患者さんも増え、夜討ち朝掛けの毎日を過ごすようになってきました。その結果、救急動脈塞栓術や肝細

胞癌の塞栓術の数では本邦三指に入るところまでできています。これは偏に技師さんや看護婦さん等のco-worker及び医局講座の壁を越えた全病的な若手医師の方々の御協力の賜と感謝しています。良き先輩、同僚、後輩のおかげで好き勝手なことをのびのびとやらせていただいた私ですから、自分がされてうれしかったことは積極的に行ない、嫌だったことは人に強いなような男になりたいとおもっています。福岡大学は極めて恵まれた環境にある私立大学です。地の利(東京、北海道からでもヒトツ飛び、こんなきれいで部屋代の安い病室はない)と遠方の人には好評、新設の私立大学である利点(文部省に強制されることなく出来る斬新なsystemの導入が可能、開かれたガラス張りの医局の設立も可能)を生かして、Fukuoka Japanを目指して皆様と頑張りたいと思っています。最後に、臨床研究は数こそ力であり、沢山の患者さんを皆で集める努力をすることが福大発展に必須であることを強調して稿を終わります。



広木 忠行教授の略歴

- | | |
|----------|---------------------------------------|
| 昭和34年 3月 | 東京医科歯科大学医学部卒業 |
| 〃 35年 4月 | 〃 第3内科助手 |
| 〃 38年 9月 | 〃 心臓血管病研究施設助手 |
| 〃 45年 1月 | アメリカ合衆国シンシナチ大学内科心臓部門フェローとして出張(46.7まで) |
| 〃 47年 4月 | 東京医科歯科大学医学部講師 |
| 〃 49年 1月 | 福岡大学病院助教授 |
| 平成 3年 4月 | 〃 筑紫病院へ所属換え(内科・消化器科) |
| 〃 4年10月 | 〃 筑紫病院教授(内科) |

『内科教授就任に際しての所感』

筑紫病院内科 教授 広木 忠行

私は平成4年10月1日付で福岡大学筑紫病院内科教授に就任しました。先日、同窓会報に何か執筆するよう依頼がありましたので、この機会に自己紹介と内科の卒後教育にかかわる私の所感を少し述べさせていただきます。

顧みますと、東京医科歯科大学第3内科(鳥

本教授)に入局後、同大学心臓血管病研究施設生理部門(佐野教授)、米国シンシナチ大学内科心臓部門(N. O. Fowler教授)、福岡大学第2内科(荒川教授)・臨床検査部(黒田教授)を経て、福岡大学筑紫病院内科に移ってまいりましたので、恩師・同僚との様々な出会いがあ

り、万感こもごも到る想いです。その中で、やはり、入局間もなくで、診療に懸命だった頃、島本教授が「自分の家族の病気をみられる医師になれ」という当時では、逆説的なことを言われたのが一番心の底にしみています。これを今様に解釈しますと、science（医学）とart（医術）を兼ね備えた医師になれということだろうと思います。あるいは、平たくいいますと、冷静な目を持った腕がいい医師にということではないかと思えます。それ以来、そういう医師像を目指してきましたが、まだ、その目標にはかなり遠い感じがします。

一般的に、日本では、大学病院の内科医は伝統的に、science 重点主義で、研究面の業績が重視され、一般病院の内科医は逆に何より優れた art に基づく診療面の業績が評価される傾向がみられるようですが、私は平成3年4月福岡大学筑紫病院内科部長として赴任以来、これからの内科部門の将来は今が医師過剰の時代だからこそ、優秀な内科医をいかに多く育てられるかにかかっていると考え、卒後教育を最優先の課題としています。それで、内科スタッフに専門医のいない分野の疾患については七隈の専門医にコンサルテーションを依頼する外、さらに広く、学内外から講師を招聘し、臨床に則した内科フォーラムやセミナー、循環器カンファレンス、不整脈フォーラムを設け、既に、荒川教授（高血圧診療のトピックス）、西丸教授（脳梗塞の治療）、久留米大古賀助教授（心筋炎の臨床）、東大多田教授（免疫学の最前線）、九大竹下教授（心血管病と血管内皮）、藤田保健衛生大渡部教授（不整脈心電図の電気生理学的な診かた）などの諸先生に啓発的な講義をして

頂き、現状では、内科臨床修練の最善のカリキュラムを組むことができたように思います。また、対外的には、筑紫医師会内科医会と筑紫病院内科共催による筑紫循環器カンファレンスで、広木が「狭心症・心筋梗塞のケーススタディ」、Constant 教授が「心臓病診断の実地教育」の講義を行いました。

研究面では、現在、心電学の他、頻脈性不整脈の電気生理と冠動脈疾患や閉塞性動脈硬化症の病態生理化学を主要テーマにしていますが、ここでも、各内科スタッフが研究テーマの問題点を十分に把握するよう、学外よりそれぞれのテーマ毎に、最適な講師、九大下川博士（冠血管攣縮の薬理）、鹿大丸山助教授（血管壁細胞の機能と血栓症）、東大井上講師（自律神経と不整脈）などを招聘し、“State-of-the art lecture”をして頂きました。因みに、State-of-the art lecture は適当な邦訳がなく、国際心電学会会長の Peter W. Macfarlane 教授に直接尋ねた所、これは、現点における most sophisticated Knowledge and technology lecture といい変えられるそうですが、研究面における一種の卒後教育で、現在の細分化された専門分野の研究状況の最前線がよく理解できる点で、大変有益なものだったと思います。

福岡大学筑紫病院内科部門は、この平成5年3月で発足後2年になりますが、science と art を兼ね備えた内科医のための内科部門を目指して、教育、診療、研究の面で、スタッフ一同、切磋琢磨していますので、同窓会の諸先生の御支援を今後ともお願いいたします。

退任のごあいさつ

『20年前の思い出』

外科学第二 教授 犬塚 貞光

一口に20年といっても、私の70年の人生のなかでは可成り長い時代である。この間私は何をしたらろうか。

その答はなかなか簡単ではない。しかし時恰も福大医学部は、私が着任した時には未だ存在

しなかった（正確に言えばその時点ではまだ医学部新設の要望書もだされていなかった）ので、私は医学部の開闢以来ずっとここにいたことになる。

着任当初は、そんな風であったので香椎病院

に出向ということになった。香椎病院というと、その前進は九電病院と呼ばれ、JR香椎駅のすぐ東側、現在の九産大の西側にあり、現在は跡形もないようであるがその頃ではJRの車窓からよく見えたものである。ここでの思い出を2、3申し述べると、そのころはこの病院では、全科の当直を一人でまかなっていた。人数が少ないせいもあったのであるが、50才未満は教授であろうとなかろうと当直しなければならなかった。いまでこそ私は70才になったが、そのころはまだ50前であったので早速番が回ってきた。

とはいってもこのころはもう私は大分長いこと当直はしていなかった。従って

「腹が痛いという患者さんがきたらどうしよう。腹を開けてよいならなんとかなるが、腹を開けずに薬でなおせといわれるとこまるなあ。」

ということになるのである。

そんなことをぼやきながら当直した翌朝は、今井、樋口、増田、船津先生などのえらい先生方が私の書いた当直日誌を医局で回し読みしながら、

「真面目にちゃんと書いてある。」

などといっておられたのをよく覚えている。

当直といえばもう一つある。

たしかあれは忘年会の夜だったと思うが、自宅に帰って寝ていると、病院から電話がかかってきた。当直の若い女の子、といっても研修医の女医さんだが、

「胃潰瘍の入院患者が出血しているので輸血が必要であるが、クロス・マッチのやり方が分からないので教えてほしい」

とのこと、香椎病院に限らず、その頃は中央検査室とか輸血部などというものはこの病院にでもあるという訳ではなく、殊に時間外の受け付けのあるところは少なかったのである。

四の五のいっている場合ではないので、私は

福岡市の西の端から東の果てまで突っ走り、目の前でクロス・マッチをやってみせた。

私自身も、講義はするものの自分でクロス・マッチをやったことはなかったが、私の若い頃はこのような検査は、皆主治医が自分でやらなければならなかったもので、このような検査には私は慣れきっていたのである。

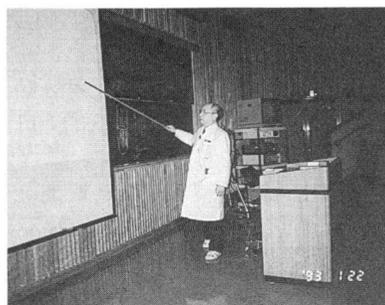
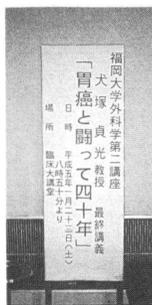
教科書を開いて、彼女に一一説明しながら、答えが出るのにさほど手間はかからなかった。彼女はこんなことは生まれて初めてのことだったらしい。こちらがテレ臭くなるくらい感激して喜んでくれた。

そこでお役御免だとばかり空いている部屋に転げ込んで、もう明け方近いので暫く仮眠をとることにした。すると目を閉じるか閉じない位の頃にまた看護婦さんが呼びにきた。輸血のための静注の針がうまく入らないのでお願いしますとのこと。私も若い頃は、静注が難しいと聞けば自分で飛んでいってはやらしてもらおうようなことをしていたので、可成な自信はあったが、これまた最近はやめていないのである。しかし患者さんの容態はとにかく急ぐ。飛び起きて患者さんのところにいった。

おっかなびっくりで点滴の針を手にする。

どうにか一発で入った。やれやれとんでもない実地試験である。

それやこれやするうちに、昭和48年8月3日救急車を連れ、パトカーに先導されて新設の福大病院への移転が始まった。患者輸送といっても、患者さんは朝御飯は香椎病院でとり、昼は福大病院で出来るよう手配せねばならなかった。私はどんなふうにしてこちらに来たのか、覚えていない。歩行可能な患者さんたちと一緒にバスで来たのではないかしら。かくて福大病院では、6日から外来が始まった。



医学部教授第一号誕生

“5回生 木村恒二郎君

島根医大法医学教授に”

木村恒二郎君（MM76、昭和57年卒業、第5回卒業）が、本年4月1日付けで島根医科大学法医学教室の主任教授に就任いたしました。同期会からは勿論のこと、我が福岡大学医学部同窓会からも初めての医学部教授就任であり、同期の卒業生として誠に誇り高きことであります。教授就任の決定を2月下旬に聞き、早速有志による祝賀会を3月6日（土）“新三浦”にて開催致しました。

突然の吉報のため、全ての同期生に連絡することができず、取りあえず学生時代に木村君と懇意であった諸君と大学内に残っている仲間を



第30回国際法中毒学会にて

会員の皆様、その後いかがお過ごしでしょうか。私は昨年の福岡大学医学部同窓会会報の中で「試作第1号は奮闘中」と題してこれまでの研究概要や近況報告をさせて頂いた者です。この度「奮闘中」のところ、平成5年4月1日付けをもちまして島根医科大学医学部法医学講座へ主任教授として赴任することになりました。元来浅学非才の身、ましてや昭和57年に大学を卒業したばかりのひよこ学者が大任を授かることになり、双肩には重いレンガが幾つも積み上げられ、心中には大小さまざまな心配の種がばら蒔かれ、正に平静を失った観があります。

卒業後11年間を振り返ってみますと、何度も法医学をやめようと思ったり、幾多の紆余曲折

主体に、出来る限り連絡を取らせて戴きました。連絡の出来なかった方々にはこの紙面を借りてお詫び申し上げます。

祝賀会には一次会に26人、二次会に20人、そして三次会にも5人の参加があり、木村君本人は当然のことながら、段取りに奔走した我々も非常に感激しました。医学部卒業12年、まだまだ自分の事が精一杯で学生時代を振り返る余裕などなかった我々が、この機に際し一同に会する事が出来たことは非常に有意義でありました。木村恒二郎君の教授就任を祝うと共に、これを囲んだ同期生の暖かさに深謝致します。

（5回生有志）

『試作第1号は神話の国 出雲へ』

島根医科大学法医学教授

木村恒二郎（5回生）

を繰り返してまいりましたが、暖かい先生方に支えられながら、いつも「自分は今一体何をすべきなのか？」という自問自答の日々であったように思います。個々人の一生は人類の歴史からみれば点にも満たないものであり、その間に個々人が、あるいは一集団ができることは一般に極めて少ないものであろうと考えます。自然科学という途方もなく未知の分野を相手にしている我々は、夢は幾らでも大きく持つことはできますが、それに見合うだけの成果は一度には到底望めません。夢を持ち、あることに大きな価値観を見いだしたならば、決して秀でることはなくてもこつこつとやり抜くことが大切ではないかと考え、これからも自問自答の日々を続

けてゆく覚悟です。

島根行きが決定した後、5回卒の多数の友人が多忙の中を、また遠路遥々集まって盛大な送別の宴を開いて下さいました。とても懐かしい面々と久しぶりに学生時代の思い出話などに花を咲かせ、時間は瞬く間に過ぎて行きました。会の最中、ある友人が検屍、検案や脳死問題についてかなり具体的かつ本質的な疑問や自らの考え方を述べてくれました。私はその時、臨床医学と社会医学の一分野である法医学が極めて近い場所に寄り添うように位置していることを再確認した次第であります。一般に、法医学は臨床医学とは全く無縁の、大学教育における一カリキュラムに過ぎないと考えておられる方は多いのではないかと思います。しかしながら、治療行為を通して地域社会と密接に関わっている臨床医学であるが故に、そこには一定のルールがあり、そのルール内ぎりぎりでの活動はとりもなおさず法医学を行っているということに結び付いているのだと考えます。送別会は大

変和やかで印象深いものとなり、無条件かつ自然に「同級生はいいものだなあ」という感情が湧いて来て、いつの間にか二次会、三次会となりました。帰宅したのは深夜2時半を回った頃だったと記憶しています。

島根医科大学は神話のふるさと出雲市にあります。由緒正しい神社や名所が沢山あり、ある先生から出雲では女性との散歩コースに事欠かず、相手に合わせて常にいくつかのルートを確認できる筈だと聞きました。この言葉は肝に銘じておきたいと思います。出雲には一年に一度神々が集まるのだと言います。会員の皆様、一年に一度と言わず、近くまでおいでの際には何時でも是非お立ち寄り下さい。神話のふるさとを散策し、心行くまで（八岐大蛇のようにならない程度？）美酒を酌み交わそうではありませんか。

末筆ながら福岡でお世話になった方々に心から感謝致しますと同時に、福岡大学医学部同窓会の今後のご発展をお祈り致します。

『木村恒二郎教授誕生祝賀会』

福岡大学脳神経外科 松田年浩（5回生）

かつて『法医学教室の午後』という映画の中で、若き主人公が「なぜ法医学教室を選んだのか」と聞かれ、「教授になるため」とジョークで切り返していたシーンを記憶している方もいらっしゃるかと思います。確かに、卒後臨床医への道を選ばず法医学教室に入局するという勇気と見識の持ち主は10年に一人いれば上出来で、そのような会話がまことしやかに聞こえてくるような雰囲気がなくもなかったのです。がしかし。それがまことなるうとは……。医学部を卒業後11年。全く驚くべきニュースが飛び込んで来たものです。

とはいえ、友達の呼び方というものはそう簡単にかえることはできないので、やはり恒二郎と呼ぶ以外にないのでありますが、その恒二郎が島根医大の教授に選出されたという情報は、またたく間に地球を七回転半するくらいのスピードで広がり、同級で祝賀会を開こうという話も

外科の田中君を中心にあっさりまとまり、去る3月6日、白井君の御尽力もあって、新三浦にて祝賀会を開かせていただいた次第です。

恒二郎はまあ、大きく分類すれば普通の人です。人づきあいの悪いガチガチの堅物でもなければ天才的なひらめきを売り物にしてきた人でもない。ここで語ることの絶対にできない多くの懐かしいエピソードを僕達に残してくれた愛すべき人物でもあるわけです。しかし当時から、サイエンスに対する真摯な態度と怠らない努力に関しては卓越したものがあり、彼のそういう生き方が法医学という地道でしかし極めて重要なフィールドで開花したのだと感じます。

祝賀会には各地に散らばった同級生が約30人集まり、まず恒二郎自身からここに至った経緯を話してもらった後、彼にいろいろな質問がぶつけられました。法医学の中でどういう研究をしているのかという質問にたいしては、自分が

一貫してやってきたのは法医中毒学の中でも特に揮発性物質に関する領域であり、今後もその特徴を生かした教室作りをやっていきたいとの返答でありました。また、地元で開業している日君からは、時々検死に立ち合わされるが、警察に圧倒されて何をすればいいかわからない。死者の前で茫然と立ちすくむことしか臨床家には出来ないのか、との現実的な質問が出ていました。これに対し恒二郎からは、監察医でなくとも医者である以上何らかの意見を持つべきである。知識がなければ現場に教科書を持ち込んででも科学しろ、との答えでありました。さらには、いつかは母校へ錦を飾ってほしい、という注文や、教授は人事権があるのでクビが

とんだら雇ってくれという切実な叫びも出るなど、大いに盛り上がった祝賀会でありました。彼が永田先生と共に九大に移って以来初めて彼と会ったという級友も多く、大きく飛翔しようとしている友人との再会はとても良い刺激、いい思い出になったと思います。

臨床の世界には「医者を選ぶも寿命のうち」という厳しい格言があるわけですが、恒二郎のように柔軟な頭脳を持った法医学者が、死者の無言の訴えを聞き出し、生前の人権を擁護するため活躍してくれるというのは本当に頼もしい限りであります。益々の健闘を心から祈っております。恒二郎おめでとう。

”玉珧” 食べて教授になろう

福岡大学外科第一 田中伸之介（5回生）

福岡大学病院周辺は我々の学生時代とは一変し、七隈四つ角なども幅広く拡張され、通い慣れた雀荘や居酒屋はその多くが移転を余儀なくされている。この開発の波にさらわれそうな茶山四つ角の一角に“井戸端”という一軒の居酒屋がある。今はその暖簾は降ろされ、かつての賑わいは見られない。ここは当時、安くて旨い学生向けの飲み屋として医学部生の溜まり場となっていた場所である。店内はさほど広くなく、コの字型のカウンターにはいつも多くの学生が寄り添い、夏には店に入れない常連客が店の前にテーブルを出しビールのジョッキを酌み交わしていたものである。

小生は医学部の親しい面々5-6人でこの店に行くことが多かったが、試験の打ち上げ時などには殆ど同期生で貸切り状態になることさえあったように記憶する。

ここに来ると決まって注文する一品に“玉珧”があった。これは“たいらぎ”と読み、本州以南の軟泥中に住む海産二枚貝で、この貝柱がいわゆる“たいらぎ”である。小生はこの“玉珧”

なる代物を生来食べたことがなかったが、小生だけでなく初めてこれを口にした仲間にも好評であり、特に今回教授に就任した木村恒二郎君はこの一品が大好物であった。当時は20代前半、気力体力共に抜群で酒も強く、この店を皮切りに数件を亘り歩き、朝方まで飲んだ挙げ句、時にはそのまま夜明けを待ってボーリング場に向かったものである。木村君のボーリングの腕前はさほどではなかった様に記憶するが（間違っていたら申し訳ない）、彼の陽気な性格も手伝って楽しい時を過ごしたものである。

祝賀会の三次会で、この居酒屋の“元女将さん”の経営する中洲の店へ出かけてみた。“元女将さん”は、今は“ママ”であるが、十年の月日を忘れさせてくれる楽しい一時であった。

自分と一緒に、普通に飲んで騒いだ同期生が教授に就任したことが、どんなに我々仲間を勇気付けてくれたことか・・・。

今後の木村恒二郎教授の活躍を祈る次第である。

お知らせ

木村恒二郎教授の記念講演が、平成5年7月10日、第12回同窓会総会に引き続き同じ場所で行われます。時間は30分の予定です。

露西亜人未熟児顛末記

福岡大学眼科 蜂谷隆彦 (8回生)

まずは言い訳から。元同級生の田中君から突然、ロシアの未熟児について同窓会誌に何か書けと連絡をもらったものの、昨年4月アメリカより帰国したばかりの僕は、英語がしゃべれるはずという周囲の勘違いで、一時期主治医をしていただけの者。詳細について興味のある方はご連絡を。いい人紹介します。

さて手元の資料によると、未熟児網膜症の治療はできないか、という旧ソ連(当時はソ連)はシベリアのクルガン市という誰も知らない所から連絡が来たのは90年7月の事でした。ここで少し蘊蓄をかたむけると、未熟児網膜症の治療には二通りあります。皆さん学生時代の講義を少し思い出して下さい。活動期病変に対する光凝固と、網膜剥離あるいは白色瞳孔に対する硝子体手術です。光凝固は日本は勿論、米国や西ヨーロッパの多施設で行われていますが、硝子体手術はほんの数施設です。シベリアからの依頼はこの硝子体手術でした。勿論、God Hand 大島教授は快諾しましたが、今度は経済的支援の依頼でした。そこで福岡大学病院、福岡大学本部の協力の約束を取付け、読売新聞、福岡ライオンズクラブよりの協力の申し出を受けて「支援する会」の結成へととなりました。また、病棟を始めとする福岡大学病院の受け入れ準備も着々と進み91年10月入院となりました。この間、彼

の国では91年8月のクーデター未遂からソ連邦の崩壊へと歴史的な一時期でした。91年10月から92年1月まで入院、つづいて92年4月に再来日し約一ヶ月入院し手術をうけました。92年暮れに再再来日した際の検診で、「お母さんの顔が見えていますよ」との大島教授のお墨付きを貰い慶んで帰国しました。この間の話はニュース等で皆さんもご承知と思います。その後「支援する会」のさらなる活動で、旧ソ連との交流は続き92年6月より9月まで2名、93年2月より5月まで2名の医師が未熟児の管理及び未熟児網膜症の治療の研修で来院しています。

最後に何か裏話をと言う御依頼ですので、ひとつつつ。

最近、紹介も含めて外来患者数が増えました。我々はこれを「ドミトリー効果」と呼んでいます。時々、「網膜症と白内障はどう違いますか」などという訳の解らない電話が掛かって来ますが。

当時、クルガン市から通訳として女性が一人同行してきました。彼女は同市にある戦車工場で働いていましたが、工場閉鎖に伴い失職してしまいました。しかし、彼女は福岡でロシア語教師として職を得ました。

卒業式、入学式スナップより



卒業記念植樹



学部長の挨拶に聞き入る新入生

11、12回生卒業記念桜



新入生に挨拶する高木会長



教室紹介

整形外科教室

福岡大学整形外科教室は昭和47年(1972年)4月、高岸直人先生が初代教授として赴任され開講しました。高岸先生が赴任された当初は医局は高岸先生、現筑紫病院教授の松崎昭夫先生を含め4名でした。高岸先生の多大な御努力、御人柄、素晴らしい御指導力によって教室は発展し現在の教室の基礎を作られました。平成3年(1991年)10月より二代教授として九州大学より緒方公介先生を迎え、現在同門140名、教室員80名を擁する大所帯となっています。現在の教室スタッフは緒方公介教授、葉山泉助教授、内藤正俊助教授、リハビリテーション部長の岩崎敬雄助教授、3名の講師、助手5名、医員5名、大学院生8名、研修医、さらに救命救急センターに助手1名、医員1名を派遣しています。最近では入局希望者は多い傾向にあり、昨年は8名入局し、今年も入局希望者は12名であります。

診療・研究グループは、1)膝関節、2)股関節、3)肩関節、4)リウマチ、5)骨・軟部腫瘍、6)脊椎、7)手の外科、8)小児整形、9)形成外科などがありそれぞれで診療、研究に当たっています。また、それぞれに国内、外での学会発表も多数あり活躍中であります。外来患者数は一日平均約90名を数え、一般外来のほか、膝、肩、リウマチ、形成外科、スポーツなどの特殊外来を設け診療しています。

昨年手術は741例で月曜、火曜、木曜、金曜日の手術日は朝から夕方まで隙間なく手術を行ない、整形外科56床の病棟は常に満床です。月曜、水曜日は緒方教授の総回診、金曜日は助教授回診が行なわれ、カンファレンスは月曜日午後レントゲンカンファレンス、新患・術前・術後カンファレンス、水曜日、金曜日早朝に、新患・術前・術後カンファレンスがあり、活発に討議しています。また月曜日夕方の抄読会をはじめ、グループ別の抄読会も行なわれ、学問をする上で非常に充実しています。また、緒方教授は米国ワシントン大学で5年間研修を受け、



さらにワシントン大学医学部講師も歴任された関係で米国での留学機会も有り、現在教室員2名が米国留学中で、さらに今年7月からはもう1名留学予定であり、研究をする上では当教室は申し分のない環境であると思います。

また、スポーツも盛んで、早朝テニスの練習、夏の西日本野球大会に向けての野球の練習を行っています。さらに、4月のお花見会、8月の海水浴旅行、9月の開講記念会翌日のゴルフ、テニス大会など楽しい行事もあります。昨年は教室開講20周年を迎えました。緒方教授が日頃から言われるのは“学問は非常に厳しいものであるが、厳しさの中にも楽しく皆と一緒に整形外科を勉強して行きたい”ということです。このモットーをもとに、さらなる発展を目指し、世界的なレベルを目指し教室員一丸となり頑張っています。教室の雰囲気も大変明るく、まさに前途洋々たる教室であります。

文責：医局長 池田 実

産科婦人科学教室

昭和48年、Rh血液型不適合妊娠の日本の第一人者である白川光一教授の下、周産期医学のパイオニア金岡毅助教授、婦人科腫瘍学が専門の指方照章講師、婦人科内分泌学が専門の熊本有宏講師ら、広く全国から優秀な人材を集め我が福岡大学医学部産婦人科学教室は誕生しました。以来、今年で20周年を迎えます。その間、当大学1回生の鬼木寛二、田口星、山本和喜らより15回生まで他大学出身者も含め78人の同門を数えています。

教授・助教授の専門分野である周産期医学の分野ではその後、本学出身者の中から井植邦雄講師(2回生)、内田克彦助手(4回生)、篠原

龍彦助手（5回生）、原田啓之助手（7回生）らが産科病棟医長を歴任、その一翼を担ってきました。その間、井植（上記）渋谷博孝講師（3回生）は免疫学で、内田（上記）、牧野康男（8回生）はパルスドロッパーで、市原次郎助手（7回生）は臍帯血管の研究でそれぞれ素晴らしい業績をあげました。また、小林秀樹助手（4回生）は現在勤務中の国立循環器病センターにて現在も胎児治療の分野で業績を重ねております。さらに、昭和62年には和泉秀隆講師を九州大、平成3年には瓦林達比古助教授を佐賀医大から迎え、両先生の専門分野である子宮筋の国内トップレベルの研究施設としての性格を加えることとなりました。これにホルモンの薬理が専門の松尾直裕講師（4回生）らが研究グループに加わり、基礎的な研究面でもさらに業績をあげつつあります。

不妊・内分泌領域では平成1年に九州大より吉満陽孝講師を迎え、詠田（旧姓：井上）由美講師（3回生）、池田（旧姓：栗栖）景子助手（7回生）らとともに、平成2年9月、福岡県内の大学では初の体外授精胚移植の妊娠成功例を得るに至っており、その後も着々と成果をあげています。また、同グループの詠田講師（上記）は卵子培養液中のエンドトキシンの研究では日本の第一人者であります。

婦人科腫瘍の分野では平成3年に九州大学より東原潤一郎講師を迎え、婦人科病理学を専門とする江口冬樹助手（6回生）、江本精、馬渡秀仁（8回生）らと共に研究グループを形成、最近では大幅にその症例数を伸ばしております。特に悪性腫瘍症例数の増加はめざましく、これまでの地道な努力が報われつつあります。

上述の通り、診療のみならず研究のactivityも高く、国際学会を含む学会・研究会への参加にも積極的です。また、これまでに多数の学位取得者も生み出しており、大学院に進む者も少なくありません。現在も佐藤雅子（7回生）、森下富士夫（8回生）の両名が大学院在学中です。さらに、最近では海外への留学生も増え、去年は和泉講師（上述）、松本信一郎（5回生）がアメリカに留学しています。

また、当医局では研修スケジュールの充実にも力を注いでおります。豊富な経験症例（おもに手術）を確保しながら、科外ローテーション

も行っております。その結果、昨年の入局者にあっては何処に出しても恥ずかしくない研修内容であったと自負しております。また、同時に医局員の収入の道の確保にも留意し、十分なネーベン先を確保する事にも余念がありません。そして、関連病院の確保にも積極的で、現在、10名の医局員が学外の国公立病院で勤務中です。

一方、最近では開業した医局出身者も数多く、本学出身者では井植（上記）、明石輝久（4回生）、池田（旧姓：伊藤）信子（4回生）、内田（上記）、瀧之上祥徳（4回生）、古野剛一（6回生）、牛嶋春生（6回生）らがすでに開業し、それぞれの地域で活躍しています。

さらに仕事の面以外でも、我が教室では充実した医局ライフを送っております。co-medical staffも参加の医局旅行は一昨年は韓国、去年は沖縄ラマダグネッサンスリゾートと豪華で、この他に有志参加の北海道スキーツアーなどにも多くの医局員が参加しています。スポーツも盛んで、昨年の九州管内の大学対抗野球大会では優勝し、白川杯テニス大会も毎年開催されています。

こういった、目一杯、仕事をして勉強をしたら、一生懸命遊ぶという産婦人科医局の明るい性格が学生さん達にも浸透し始めたためか、産婦人科の全国的な不人気にもかかわらず、去年は辻岡寛君、久保田郁子君、窪田（旧姓：伊藤）真知君の3人が入局してくれました。そして、今年はそれをさらに上回る6人（他学出身者1人を含む）が入局予定です。

若い力を得て、さらに充実した診療・教育・研究機関となるべく、福岡大学医学部産婦人科学教室は今後も医局員一丸となって進んでいくつもりです。福岡大学医学部同窓会員の皆さん、どうか宜しく願います。

文責：馬渡秀仁（8回生）



キャンパス便り

第12回医学祭を振り返って

医学祭委員長 宮原大輔

平成4年10月31日より11月3日まで、4日間にわたり第12回福岡大学医学部医学祭を開催致しました。

医学祭とは、いろいろな可能性(=夢)を持った人々が集まり、その人々のあふれ出る才能により成功するものだと思います「あふれる夢を求めて」というテーマをもとに行いました。

医学祭期間中というのは例年晴天に恵まれているのですが、今回は私の日頃の行いが悪いせいか4日間のうち3日間が大雨に見舞われてしまい医学展への入場者数が心配されましたが、スタッフ一同の頑張りにより例年と変わらず約1800人の入場者がありました。

今回、医学展では、恒例の無料健康相談や、心理テスト、コンピューター占い、恋人リサーチ、臓器や疾患のビデオ放映会などを行いました。来場者の中には、無料健康相談に毎年来られているという老年男性や、3年連続で来ているという本学学生などが含まれており、地域や本学に医学展が定着してきたと思われます。

又、医学展のほかに、恋のドキドキ作戦というペア対抗で行う体育祭も企画しましたが、これは残念ながら雨のためにクイズ大会に変更になりました。しかし、出場者とその仲間が大変面白く、盛況の中におわって本当によかったと思います。

今回の医学祭が悪天候の中で成功した理由としては、それぞれの企画責任者の人望や実行力

はもとより、昨年の幹部研修会において各クラブから実行委員長を選出する事が決定し、それによって実行委員長が増えたことが一番だと思われます。これによって新しい仲間ができ、さらには意外な才能を発見することもできました。

しかし、他の医学部と比較してみるとまだまだ少ないのが実情です。他の医学部のように全学生で行うのは無理としても、これからは医学祭に対して学生の関心を高めるよう努力し、皆で楽しめる医学祭になればと思います。

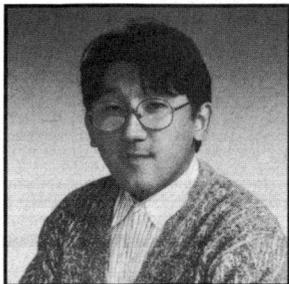
最後になりましたが、今回も医学祭に対して同窓会の皆様方の多大な援助をいただきまして本当に有難うございました。医学祭も今年でやっと13回になります。人生でいうと中学生になったばかりですからまだまだ未熟です。これからも、より一層の御指導、御援助くださいますよう心から御願ひ申し上げます。



現在の会員数

・正会員 (1~16回生)	1,728名	合計
・準会員 (学生会員)	636名	
・特別会員 (教授)	60名	2,424名

訃報



幾野 俊英 先生 (12回生)

平成5年1月30日逝去されました。

(連絡先) 〒811-12

福岡県筑紫郡那珂川町片縄1丁目60 シャトレYK201

幾野多恵子様 電話092-952-0605

幾野君を偲ぶ

沖縄琉生病院 小牧伸一郎 (12回生)

一、一月三十日

この日の沖縄は、空は青く澄み、気温も15.6度と、すでに春とっていいほどの気候であった。午前中の外来診療が一段落し、医局にもどった午前11時すぎ、その電話は鳴った。「小牧先生、奥さんからお電話です。」「どうも、すみません。」翌日ゴルフの予定のはいっていた私は、その予定変更の電話かと気軽に受話器をとった。「もしもし、幾野さんが亡くなったって。今朝午前1時すぎに交通事故で・・・。」「何だって」もう1回、「本当か」「本当よ、今、幾野さんのお姉さんから電話があって、くわしいことはよくわからないけど、とりあえず連絡だけでもって。信じられない。」妻はもう涙声になっていた。(妻も私と結婚する前から幾野を知っており、私達の結婚披露宴では、彼に友人代表としてスピーチをお願いしたくらいである。)

「わかった、すぐ帰るから、もう一度お姉さんに電話をして、今後の予定を聞いておきなさい。どこで何があっても必ず行くから。」

悲報を聞いた。30数年生きてきて、絶対に聞きたくない電話だった。信じられない。間違いだろう、間違いであってほしい。なぜか、心臓の鼓動が確認できた。

それからの私は頭の中が混乱していた。「どうしよう」「どうすればいいんだ。どうしよう」そのくり返しであった。家へ帰り、今後の予定を聞き、すぐにその日の名古屋便の予約をとつ

た。「本当に信じられない。一度顔を見なければ、遅れたらみれなくなってしまう、とにかく顔を見に行こう」初めて妻の前で泣いた。嗚咽がこらえきれず声を出して泣いてしまった。

二、思い出

幾野との思い出は数々ある。その中でも最大の思い出は、卒業後の沖縄旅行だろう。結婚前、妻は沖縄におり、幾野は、なかば強制的に沖縄へ誘い出した。石垣島、竹富島、西表島、沖縄本島以外にも離島をまわった。

本島の南部観光では、シーズンオフということもあって観光バスの中は、私と幾野の他には、3人の観光客しかおらず、かわりにバスガイドの実習生が数人同乗していた。幾野曰く、「小牧さん、声をかけましょうよ、今夜の約束をとりつけましょうよ。」確かに若者(決してハンサムとはいえないが、幾野ごめん)は二人だけ。実習生の方も気になるのか、視線がチラチラ。私に今の妻がいなければと思いつつも「幾野ごめん、今夜は先約が」と断念、しかし幾野にはちゃんと妻の友人を紹介し、沖縄旅行中、彼女は我々と同行した。

私と知り合った頃の幾野は、カラオケをしらなかつた。私はカラオケが好きで、幾野と一緒に飲みに行くたび、カラオケを強制し、味を覚えさせてしまった。そのうち、「小牧さん、さあいきましょうか」と歌本を出すほど。その頃

彼がよく歌っていたのが「恋人たちも濡れる街角」「我がよき友よ」であった。通夜の際、福祉村病院の飲み会でもよく歌っていたと聞き、非常になつかしく思った。

三、幾野へ

一生つき合っていける友達だと思っていた。確かに一生つき合ったわけだが、それがこんなに短いなんて、おまえは本当に悪いやつだ。おまえと一緒にいて、一度だって不愉快な思いをしたことはなかった。ちょっと遠いけどその気

になれば、飛行機でひとつ飛びだと思っていたから、いつだって行けると思っていたから…。さびしい、本当にさびしいよ幾野。又、一緒に飲んで、さわいで、あの「あへー」っていう声と顔が見たい。

幾野、ちょっと遠くなると思うけど、いつか必ず行くから、先に行ってい飲み屋をさがしておいてくれ。あたりめのおいしい、かわいい娘のいる、安い店をたのむ。

合掌

教育職員人事

平成4年10月以降（講師以上）

[退職]

臨床検査医学	教授	濱崎直孝	4年12月31日	九大臨床検査部
外科学第二	助教授	佐野千秋	〃 〃	壱岐公立病院
健康管理科	助教授	本岡健一	5年1月8日	死亡
生化学第二	助教授	織田公光	〃 1月31日	新潟大学歯学部
外科学第二	教授	犬塚貞光	〃 3月31日	定年退職
解剖学第二	教授	山田英智	〃 〃	〃
外科学第一	助教授	山本博	〃 〃	糸島医師会病院
内科学第二	講師	楠田三樹子	〃 〃	仲原病院（5回生）

[昇任]

心臓外科学	教授	木村道生	5年4月1日	
救命救急センター	教授	田中経一	〃 〃	
小児科学	助教授	濱本邦洋	〃 〃	
生化学第二	助教授	三角佳生	〃 〃	
内科第二	講師	岡部真典	〃 〃	
腎センター	講師	小河原悟	〃 〃	（7回生）
整形外科	講師	柴田陽三	〃 〃	（4回生）

会議報告

平成4年度第7回理事会 医学部B会議室

平成4年10月23日（金） 19時

- 議題 1. 同窓会の在り方について
2. その他

平成4年度第8回理事会 医学部B会議室

平成4年11月27日（金） 19時

- 議題 1. 会費の分割払い制採用について
2. 旅費規程について
3. 福岡圏選出評議員の移動に関する取扱について

4. 今後の会議計画

5. 同窓会の在り方について

平成4年度第9回理事会 二日市 魚源旅館

平成5年1月30日、31日（土、日）
17時～翌日10時

- 議題 1. 今後の同窓会活動について
2. 理事の在り方について
3. 会計年度の変更について
4. 第12回総会について
5. 同窓会報の編集方針について
6. 同窓会の営利事業について

平成4年度第10回理事会 医学部B会議室

平成5年2月6日(火) 19時

- 議題 1. 旅費規程について
 2. 愛称選考について
 3. 理事の業務分担の変更について
 4. 卒後教育について
 5. その他

6. 平成6年度評議員選出要領について

7. 平成4年度決算見込みについて

8. 平成5年度事業計画について

9. 平成5年度収入支出予算について

10. 営利事業について

11. その他

平成4年度第11回理事会 医学部B会議室

平成5年3月26日(金) 19時

- 議題 1. 愛称投票について
 2. 理事の業務分担について
 3. 第12回総会について
 4. 会則の改正について
 5. 細則の改正について

平成5年度第1回理事会 医学部B会議室

平成5年4月23日(金) 19時

- 議題 1. 愛称の選考について
 2. 営利事業について
 3. 平成4年度決算について
 4. 第12回総会の実施要領について
 5. その他

過誤訂正表

*下記のように誤植がありました。謹んでお詫び致しますと共に、ご訂正方お願い申し上げます。

編集委員

◆同窓会会員名簿(1992年版)

- ・ 4 p 左列13行目 第4条「在生生徒」を「在生」に訂正
- ・ 6 p 左列11行目 監事「田口 純一(1)」を「朔 啓二郎(1)」に訂正
- ・ 7 p 7行目「筒井隆一(5)」を「筒井隆一(4)」に訂正
- ・ 7 p 16行目 「野田 寛(5)」を「野田 寛(4)」に訂正(2ヶ所)
- ・ 12 p 3人目 元永 隆三「元永外科クリニック」を「元永外科クリニック」に訂正
- ・ 20 p 9人目 柴田 邦彦、郵便番号「勤890」を「勤892」に、「内科柴田医院」を「内科柴田病院」に訂正
- ・ 37 p 2人目 「潤田 裕三」を「潤田 裕二」に訂正
- ・ 45 p 8人目 「(旧姓名 森田 健司)」を「(旧姓 森田)」に、住所を「福岡県久留米市通外町11-16 ライオンズ`マンション久留米駅東1403」に訂正
- ・ 56 p 6人目 廣瀬 清人「長崎大学病院第二外科」を「長崎大学病院第二内科」に訂正
- ・ 61 p 下から5人目 「託間 和彦」を「詫間 和彦」に訂正
- ・ 92 p 8人目 「稲田 義久」を「稲田 善久」に訂正
- ・ 112 p 9人目 西村 宏達のふりがな「ひろたつ」を「ひろかつ」に訂正
- ・ 120 p 10人目 「井出口 博」を「井手口 博」に訂正
- ・ 152 p 右列7人目 「井出口 博」を「井手口 博」に訂正
- ・ 152 p 右列下から14人目 「稲田 義久」を「稲田 善久」に訂正
- ・ 154 p 左列10人目 「潤田 裕三」を「潤田 裕二」に訂正
- ・ 154 p 右列3人目 「大田みちる」を「太田みちる」に訂正
- ・ 161 p 中列下から7人目 「託間 和彦」を「詫間 和彦」に訂正

- ・ 164 p 右列下から4人目 西村 宏達のふりがな「ひろたつ」を「ひろかつ」に訂正
- ・ 170 p 左列下から7人目 「森田 健司」を「森田 健二」に訂正

◆同窓会会報 13号

- ・ 8 p 左列18行目 監事「田口 純一(1)」を「朔 啓二郎(1)」に訂正
- ・ 9 p 右列4行目 「菊地病院長」を「菊池病院長」に訂正
- ・ 9 p 右列下から6行目 「菊地病院長」を「菊池病院長」に訂正
- ・ 17 p 右列4行目 「主張」を「出張」に訂正
- ・ 33 p 右列3行目 「重傷肺炎」を「重症肺炎」に訂正

編集後記

我が同窓会も高木会長、重田副会長の新体制となり満一年、理事会も定期的に開催され、何かしら新しい息吹が感じられるようになってきた。これに伴い同窓会報もより機関誌としての性格をもたせる為、”理事会の議事録や活動状況を詳細に報告しては？”との意見も出され、本誌の内容が再検討された。

これにより今回は少しばかり、議事録を多く掲載し同窓会機関誌としての色合いを出すように努力してみたが、本質的には同窓会員の一人でも多くの方々に親しみをもって読んで戴ける情報提供誌としての性格も持たせたく、硬軟取り混ぜた趣のある福大独自の同窓会報作りをしていきたいと考える。

福岡大学医学部同窓会広報担当

田中伸之介 (5回生)

伊東 博巳 (7回生)

平田 雅昭 (11回生)

福岡大学医学部同窓会会報第14号

発行日 平成5年5月15日

発行人 高木 忠博

編集人 田中 伸之介

発行所 〒814-01

福岡市城南区七隈7-45-1

福岡大学医学部同窓会

電話(FAX) 092-865-6353(直通)

092-801-1011(代表)

内線 3032

印刷所 〒810

福岡市中央区長浜2-1-30

ロータリー印刷(株)

電話 092-711-7741

FAX 092-711-7901